

野の鳥と親心

川口孫次郎



雉です！銃砲を！といふ家僕の叫が茲に二十有一年始終吾輩の腦裏に深く刻まれて益明瞭になつて来る。

幕府の禁制弛みて以來、引續きての濫獵に今は自然のまゝに棲へる鶴は内地では殆んど見られなくなつた唯雉丈は尙族滅の悲運には陥らないで殊に狩獵法の發布せられしこの方、幸に春曉霰の中から、ケン／＼の聲を聴くことが出来る。

元來、雉は割合に人近い鳥である。山中に棲んでは居れど。食物は蟲や柴の實の外は穀食殊に豆食をやつて居る。従つて折があらば人の植付けた山裾の畑又は人里近くの畠に漁りに出てくる。其

巢構へも矢張り山際や谷底の平な藪の中にする、稀には人の栽培して居る蠶豆の畑の中を好適の地と見定めて産卵する。彼は他の鳥とは趣が異つて蛇の襲撃を毫頭懸念しない寧ろ歓迎する方であるから、産み場所に付ては割合に放膽である。殊に卵を暖むる雌の羽毛が淡き茶褐色であるから、藪の中に囀つて居つては一寸人目には識別がつかにくい、殊に例の子思ひの爲に中々容易に立たない。それ故に目敏い人間に先せられて半天て押へられたり草刈籠でふせられたりして生擒せらるゝことさへ少くないが、此方がボンヤリな人間であると爪先きに尾羽を踏みながら知らずに行き過ぐることもないではない。

思ひ起せば廿一年のその昔、頃は卯月の上旬の或朝、吾輩の家の僕が、呼吸せき切つて歸り來つて雉です 銃砲を！と乞ふ。我が父は微笑しながら怪我をするなといつて貸與した、吾輩は小供心に好奇の念に堪へないで、其後の消息を一刻千

秋の思ひで待ちに待つた。程經つて彼僕は力なげに銃を肩にしたまゝ、ブラリと素手で歸つて來た。吾輩はいたく失望したが、我父は「雉にうたれなんだが幸であつた」などと笑つて居られた。彼僕は面目なげに勝手の方に行つて、我母に訴ふるが如く述懐をして居る聞けば……今朝命によつて向ふの山際に行つて躑躅と卯の花とを折りとらむと灌佛の節に立つべき……枝に手をかけた其刹那に足下から雷が宙に飛び昇つたやうな爆裂がしたので腰を抜かして其場にドシンと座つてしまつた、切心付いて觀れば、コレはく矮鶏の卵のやうなのが、しかも十有二個、待てく雉であつたく雉であるから雌鳥が頓がて歸つて來るに相違ないならばそれをも、と早速駆け歸つて用意の獵銃拜借し、携えて先の塲所近くに折返し、銃口向けて窺ひよれば、居るわく雌鳥は早や歸り來つて、射てといはぬばかりに横になつて居る。オヤく雄鳥も來て居るやうす、ほんに美しい、重々の上

首尾、少々慾張りすぎるかは知れぬと序にあれをも併せて、一發二羽を射留めやうと、狙を定めやうとすれど、的が程よく二重にならぬ、右へ寄り左に動く、動くも道理、卵を盡く兩翼に抱えて横はりし雌の頭部をば雄が啣みて曳き去るのであつた。氣付いてからは急に氣の毒な感が起り、何んだか空恐ろしくて、其儘歸つて來ました云々といふ話。我母は切に之に賛成して、燒野の雉、夜の鶴、山が燒るがた、ぬは雉よ、此處がた、りよか子をわいて、などといつてきかせて、よくこそと褒めてやつて居るやうす、傍に女中もホンにそうと大賛成をして居つた。之は吾輩が動物の所作に趣味を感じた第一歩であつた。路の邊の草花をめでたり、山里の木立にあこがれて居る間にも一方に、それ等に消息せる禽や獸にも多くの注意を拂うやうになつて來た。鳩に三枝の禮ありといはれて居るけれど、何分此鳥の野生のは人を恐るゝことが甚しいので今日

までの吾輩の實驗では分明しない。併し宿る所は勿論大体定まつて居るやうだが、枝に上下の別はあれど、傳ふるもの、説の如くに親子の關係を示せるか否かはトント分らぬ。若し三枝を下つて宿るとせば、日本式にいへば雌か雄に對してか、或は亞米利加式に雄が雌に對してか、多分鳩は普通の日本人よりはハイカラ式で米式に宿るのでありさうに吾輩は觀察して居る。此鳥は産卵数が二つである、それがきつと雌と雄とである。鴛鴦のそののやうだ、しかも人に見つけられたと感付くと卵を可愛ゆく思はないのか其後巢に出入しなくなる。

鳥に反哺の孝ありといふのも未だ確かでない。兎に角七月末頃迄には彼等は異様な鳴聲で哀れつぽく五六日鳴きつゞけて親子の分袂をすることは事實である。其以前に或は子が親に哺くむのにはあるまいかと思はるゝ様子も見ゆる、が之は大方此方から迎へて見るからでありさうだ。卵は大底

二つ。

鶯は深山の大樹か森の老木かに巢う。現今では保護鳥たることは無論であるが、往年余の隣家の大將が攀ち登つて地上十七八間もある巢のところ達した、親鳥は爪を尖らし嘴を鳴らして蹴りに来たにも拘らず、大將は登るし、樹下では別に一隊の腕白連が手に旗をふり石油罐を敲く、わめく、叫ぶ、逐ひたつる。流石の鶯も之が爲に大將には近よらなかつた。その隙に例の大將が下を向いての報告に「眼の球のデカイ奴が之れツ丈」といつて頸筋を摘んで、さし出して下の後援隊に見せたのは二羽であつた。ヒィと其小供が叫んだ。之には大將も突然のことであつたので聊か驚いた親鳥も聲さゝつけてヒューと羽風を切て翔けつて来た。下からは鯨波が沸く大將は小供を捕つても仕方がないから、ゆるしてやるといつて、もとの巢の中に入れておいて、復た雨蛙同様に幹に抱きついてそろゝ降りて来た。今から考ふれば實に

無鐵砲極まることであつた。よくも眼をつぶさ
れなかつた、顔をかきむしられなかつたのだ、併
し、鳥せゝりは矢張り鳥せゝりをするものと見え
て、現に其大將は過る三四年前から、日本兵士二
百人ばかりの大將で、滿洲の奥に驚の巢をせゝり
に行つて居つた。

水鶏や鶺鴒は其棲家が水邊であるから其巢も水際
につくる。鴉のやうに浮巢ではない、大低真菰の
中である、稀には菖蒲や葦萩の中に構ふことも
ある。前者は卵が比較的比較的に小さくて巢の作りが粗
末で高い、卵の数は五六個が通常であるが、後者
は巢の造りが大きくて用材も粗い、ズツと葦間菰
間に通路が出来て居るから道さへ見付けたら巢の
在家が直ぐわかる。卵の数は多いのが十個十二個
である。始めて巢掃をした時に人に見付けられた
と感付かば其巢を見捨つるが、愈産卵してから後
である、多数の卵の中から一個や二個を盗まれ
ても平氣で暖めて居る。三週間足らずで、火口の

塊のやうな眞黒なムク／＼な小供が孵化する。
二時間も経てば其雛は早や巢を出て自由に遊ぶ、
敵に追はるゝと直ぐ水に潜ぐる。久しく浮ばない
がと訝つて見て居ると此方が間拔だ。奴さんも沈
んだまゝで久くは我慢が出来ないと見えて、直ぐ
向ふ水藻の間から水の表面に鼻の先丈を出して人
を馬鹿にして居る。そこで今度は此方から其鼻の
先きを一寸三本の指で摘んで失敬しやうなら、何
んでもない容易いことだが、失敬したからとて人
手では育ちにくいから見逃かしてやる。尤も親鳥
は此際キョツ／＼と稍隔つたところで小言をいつ
て居る。雉の子供も之とよく似て居る、茶褐の虎
斑のやうな奴さん、轉がるやうに逃ぐるが絶対絶
命かなはない時には、草の中でも木の葉の間でも
所謂頭丈隠くして小丸尻つぽホツたてゝ、隠れ
得たりとすまして居る、可愛いものだ。それをソ
ロツと手で握ると、小供ながらも眼をつぶつてズ
／＼と脚を伸ばして硬直状態をなす、これ／＼は握

り方がさつかつたので絶息してシヤクばつたので
あるまいかと、手をゆるめたら最期、コロリと轉
がり落ちて、一目散に駆け出して逃げてしまふ。

彼處で親鳥はコツ／＼と呼んで居る。

ボンノ一(又葦五位といふ)は浮世が厭になつ
たとかで電信線に首をひつかけて死んでゐたとい
ふ話、は堀や澤の多い地方でよく耳にすることだ
が、余は敢て其事實の保證人にはたゝぬ。但し此
鳥は少々薄ノロである、天保通寶以下である。菰
や萩の間に巢ふが、愛情もあの顔付通りで、又一
として子供を左程かわいともさりとて又憎いとも
なしといふ調子、粘液質の鳥だ。

卵の保護に關して一層無責任のやうなのが川千
鳥だ、礫の色と似た親鳥が礫の間に身を容れる丈
に巢を造くる、造るといつたとして何の設備もしや
しない唯礫を押のける丈のことだ。

其處へ生み放して時々來て暖むる、上からも横か
らも掩蔽物かない全くの蒼天井の下だ、卵の色も

其斑點も丸で石と同様だ。

之に反して尾長鳥の巢は樹上に構て居る上向き

のも、中で一番深い者のやうだ、丸で壺のやうだ。
枝の間、蔽ひのある、往々蔭などの葉がくれを利
用して高い處に組んで居る。卵は六個が多い中だ。

掠鳥と等しく敵が近寄ると親鳥がギャ／＼いふ
最も神經過敏なは鶯だ。其巢はコンモリとした

例へは茶の樹や笹藪の中に構へらるゝ。細き木の
根を外部に、小笹の葉をその次に、内部は細かい

綠苔でチンマリと丸めて、横から出入するやうに
なつて居る。容易に發見が出來ない。卵は五つが

通例のやうだ。産卵してから後でも人に發見せら
れて一寸でも卵に觸れられたら、早速見捨て、し

まう。一体にどんな呑氣な鳥でも巢をいぢられた
ら大抵來なくなるが此鳥は一寸指がふれても覺る

やうだ。

四十雀仲間、横向きに巢を吊るのが通例であ
つたが、大抵は木のウツロを利用するやうに近頃

傾いて来た、十年前の彼等より昨今の彼等の方が
明治の盛運につれて、中々便利法をやり居るやう
だ。人に用心するやうでしないやうで、トンと呼吸
がとりにくい鳥だ。尤も山雀丈は深山育ちである
にも拘らず、非常に早く人に慣るゝ。

翡翠は、明かに人に警戒して可成近よらないや
う可成見付けられまじとする有様があり、見透
く。彼は巢に入るにも、先づ少し隔つた枝にとま
つて四邊を見すまし、人氣のないのを確かめた上
でなくては、飛び込まない。勿論之は巢の構造が
他の鳥と趣を異にして居るからでもあらう。彼の
巢は土の穴だ、堤などの崩れ順次下方に引けて
殺げたところで、毒虫も蛇も這入ることの出来な
いとこに、横から拳小の口を掘り開けて暫くは奥
上りに頓がて其奥に大きく丸く掘り下げてそこを
巢として居る、無論何物も敷いてはゐない、唯其
土窟の碗のやうな凹みに産卵する。子供が萬一人
手に落つるやうな不運に遇つてもふり向きもしな



い、知らぬ顔の半兵工である。自身の用心深とい
ふよりは愛情が乏しいといふ方が至當のやうだ。
論より證據、あの奇麗な服装をしてゐながら家庭
の不潔といつたら、たまらない。他の小鳥は皆子
供の排泄物をばくわへて遠く運んで他の處へ捨つ
るが、此鳥は二度もそんな面倒を見ない。それ故
に子供等は巢の中から玄關口に尻を向けて、發射
して用便をして居る。彼等は肉食だから脱糞は發
射すべく適當に白き液体より成立つて居るのだ。
吾輩も現に反射鏡を携えて行つて、巢内の彼等の
生活の状態を窺はうとした際、何んだか子供か尻
を此方に向けてモヂ／＼ふつてゐるから、これは
おかしいと思つて居る刹那、シタ、か一發、危い
ところを負傷するのであつた。どうも失敬な奴だ
と非常に癢に障つたけれど、君子自重と自から制
してかいたとがあつた。

河原ヒワは割合にコスイ鳥だ、小さな形をして
ゐながら高い高い枝に巢ふ、大底は苦造り、卵は

六個が關の山、百舌鳥は割合にあつかましい、手近いところに巢ふ、其構造も至つて無造作である。でも稀には人に見付けられた以來、卵を捨て、二度と来ないものもある。實地に目撃するところによれば大抵の小鳥は、巢の邊に、蛞蝓や蝸牛の何物かを利用してゐるやうだ、之は確に彼等にとりて蛇の襲撃を防ぐつもりであるらしい。

杜鵑は他の鳥の巢に一個づつ生み落して、他の方に俟つて巳の種族を維持し行くのみで、絶えて自から巢くはない、掬養しない、と人はいふけれど之は實際に證據がないから、うそともほんとはいへない。吾輩の寡兒なる、實地に未だ一度も見たことがない、あれは多分机の上でいふことだらふ。

頬白は大抵あまり高くない木の枝に巢ふ。が又岸や崖に棚をつくつて丁度枝垂れ陰になつたところにも巢ふ。造作は驚ほどに巧妙でないけれど、内部を棕椏でかゝつたあたりは百舌鳥などよりは

遙に精巧である。若し敵に子を奪はれさうになると非常に狂奔する。愈奪はれてしまふと、悄然として其近傍を徘徊する有様が誠に可哀想だ。ヒヨツとチ、てふ我子の聲に似た響でもしようものなら何處までもついてくる。尤も山奥ので、平生のまり人を見なれないものであると、自然人を怖れて子を無造作に見捨つることがある。

雲雀は一切土を掘つて巢ふが、餘程工合をよくして居るので蛇など其上をスーと通りこしても分らないやう、子供等にも教育をして居る、愛情は前の頬白より一層厚い。若し其子が人の爲に捕はれて、籠の中でチヨ／＼呼べば、親鳥は籠の在所に従つてきて、其子が大人になるまで始終虫をくわへて来て養育する。一朝其子が居なくなると雄鳥も歌はなくなる。

或年の舊の五月、麥の刈り跡に例の巢が残されて居つた。中に卵が唯二つ………通例ならば五個か六個なるべけれど………之は多分二番子か三番子く

らるの産み始めであるに違いない、随分季節に後れた方であつたのだ。今日愈鋤きかへして水田にするといふ。致方がないから、せめて卵丈なりとも救つてみばやと思つて、余は携え歸つて其一顆を隣の老婆の家の燕の巢に入れた、余は此時意外の思をしたのは燕の卵と雲雀のそれとは其大さが非常の差があることであつた。心して親鳥の大きさをよく比較してみると何でもないことであつたが、一時は思の外の心地がした。他の一顆を宅の離家の軒なる雀の巢の中に入れておいた、卵は矢張雀のよりも大きい、一週間許見て居ると何れの親鳥も熱心に暖めて居るやうであつた。八日目と思ふに、隣の家の燕の巢に桶をしてみると雲雀が愈孵化して居る、早速歸つて宅の雀の巢を見ると、等しく雲雀一匹丈は化して居る。翌日再び燕の巢を見ると昨日見た雲雀の子外に主人燕君の子供も二人孵化して居つた、形は非常に小さい雲雀の兒は産毛か立つて首を上げて黄色の口を開

くけれど、燕のは首をゴロ／＼しながら未だ眼を開いてゐない、全くの赤ん坊だ。同時に宅の雀の城では矢張雲雀のみで未だ他に一つも孵化して居らなかつた。

其後は毎日双方へ、日参と云ふ有様、五日目にやう／＼雀のホントの兒も殻を脱し始めたので、巢の中が賑かになつた、丁度大砲の傍へ玉椿などが押し出して居るやうに。

六日目に、隣の婆さんが掌に何かを載せて、當惑したやうな顔付で、唯今到頭燕の親が此子を巢からくはへ出しました。幸に下が糖桶であつたので生命には別條がありませんでしたが、といひながら我輩の前に持つて来てくれた。見れば繼子の子雲雀だ。燕夫人つれなくも投げ出しをかましたと見ゆる。流石に吾輩も大に弱つた。併し窮すれば通ずとやら、試みに其夕方はの暗闇を利用して、彼雛を掌にのせて、重々の御危介甚だ以て申上兼ぬる儀には、とは口の中、先づ／＼例の雀の癩

室にソツと入れて生え付きの子供及び繼子一人の間に、又一人繼子を、依頼してゐいた。雀の巢の中は全くの養育院同様となつた。

翌日學校に稽古に行く前、さては學校から歸つて後、先生からいひ付けられた復習などは當分入れ掛ともいふべき有様、熱心に雀の行動に注目して居ると、雀公、形は小さくとも大草なものだ。平氣で平等に世話をして居る。全体近頃の利發な人間は目先き利いて丸で燕式だ。他人の子まで重々背負ひ込んで、汗水垂して養育するなどは決してしない。イヤそんなことをしやうものなら頓馬の標本として嘲けらるゝのが通例のやうだ。が幼兒を助けなどして他人の母に向つて生みの母と思つて其罪なき紅の口を開けて、チヨ〜と食を求むる。誰か一掬の涙なからんやだ。そのところを雀は能く要領を得て居る。斯くの如くにして到頭二羽の雲雀の繼子等も繼母雀夫人の手にその生みの五人の子供等と共に仲よく成長した。

唯惜しいことには巢立ちの時に至つて、雲雀の子供等二人は樹の枝に一寸とまりかねて地上に落ちた。之が爲に其一羽が脚部の骨折で不治の難症にかゝつて、吾輩の心はいの平當も其甲斐なく豫後不良で、聲をもたてずに天國に昇つて終つた。

跡に残つた一羽、之はよく〜の生命冥加のあつたものと見え、我輩が捌き筆の先き差出して與ふる摺餌を珍重がつて、やうやう出来上りかけた羽を搖つて食べる。吾輩の留守中は、内の女中が心配をしてくれて、臨時養育係として時々例の筆先で世話をしてやることになつてゐるが、それも程なく必要がなくなつて彼は獨りで摺餌を不機用なからやるやうになつて、頓がて一人前の前途の有望な音楽家、少くとも音楽學校助教授位には惜しいといはるゝまでになつた。

母の忠告によつて、吾輩は彼を檜舞臺に出さずべく籠から開放した。

どうしても戻つて来る。來れば例の籠の上にとま

つて、頻りと内を窮つて居る。あまりしほらしいから試みに入口を開けてやると、悦んで籠の内に踊り入る、入つて終へば枅安心といふ面持、何時開けてやつても一寸外出しても直ぐ復た歸宅するその時入口が閉ぢて居ると小言をいふ。「蒼空を我物顔に雲雀かな」とは果敢なき虚榮の夢よ、外には百舌鳥あり鷹あり鳥あり、寧ろ人間の監督の下なる此天地こそ」と發心したか悟つたか、兎に角、小乗の思ひあきらめとやら、諦めきつて、籠の中なる株の上にて聲張り上げて揚々乎として歌ふ。我母、例の女中、隣の例のお婆さん等に一入いたはられ可愛かられて、享年五歳にして歿した。病革るや、苦げなる中よりいと残り惜げに、其小やかな丸き眼に熱涙を浮べて感謝の意を表するやうつであつた。實といへば此日吾輩の家の勝手元では彼の重患の爲に大騒動であつたのだ。我母が水に溶かして與へし寶丹の一小片が幸にして一夜丈彼の命脈を延ばしたが、翌朝、母女中婆さん及び吾

輩並に妹等の看護の下に、彼は我輩の掌の上で溘焉として眠るが如くに上天した、随分辛酸を嘗めたことは嘗めたが先づ大体に於て天壽を全うしたものといつてよからう。さうあきらめたもの、尙は吾輩は心残りと思つた。

吾輩は彼の葬式を鄭重に營み終つて、歸つて来た。妹も女中も悄然として一語もない。我母は徐ろに吾輩に向つて諭された、何れにしても可哀想だ、と。

吾輩は、其後、相變らずに、自然界に道樂をやつて居る。實は我輩が專攻以外の道樂的研究といふのか全く自然界にあるのだが、併し今日に至つても、今は亡き母の彼の訓戒をは決して忘ない、今後といへども忘られないたらう。研究の爲といつても徒らに苦しめたり悲しめたりはしないで、可成彼等の自然のまゝなるに觀察し考究しやうと思つて居る。イヤそれは飛んだ愚痴っぽいぞでした。此次にはもつと元氣に引つぎ實驗談を致さう